審査の結果の要旨

氏名　羽澄　恵

心身機能の維持に関わる睡眠の障害に対しては、身体生理的側面に働きかける薬物療法を主とする治療が行われてきた。しかし、近年、生活の質の観点から心理社会的側面への介入が求められるようになっている。そこで本論文は、過眠を主症状とする睡眠障害である「情動脱力発作を伴うナルコレプシー」（以下ナルコレプシー）において加療後に生じている心理社会的問題の詳細を明らかにし、患者の生活の質的改善に向けての介入プログラム開発の基礎資料を得ることを目的とした。論文は、先行研究を概観し、ナルコレプシーの治療の課題を明らかにする第1部、ナルコレプシー患者の特徴を明らかにするために、過眠とは逆の慢性不眠症患者が直面する問題を補助的に検討する第2部、治療中のナルコレプシー患者において生じる心理社会的問題の機序を詳細に検討する第3部、結果を総合的に考察する第4部から構成される。

第1部では、1章でナルコレプシーでは薬物治療後も日中の眠気が残るために生活の質の低下が生じ、抑うつ感や特有の行動様式を示すやすいことを明らかにし、2章ではそのような心理社会的問題が生じる機序を詳細に検討するという本研究の目的と構成を示した。

第2部では3章で薬物治療を半年以上受けている不眠症患者13名の面接データを分析し、薬物治療の長期化に伴って治療への悲観や不信といった否定的認知が生じることを示し、4章でそれが治療への納得できなさや問題への対処できなさの感覚となり不眠を強めるプロセスを明らかにした。5章では薬物治療後も不眠が改善しない患者8名の質問紙データ及び夜間睡眠時の睡眠構造の分析から睡眠に関する認知の在り方が睡眠状態に影響している可能性を示した。

第3部では、治療開始後の症状残存が心理的苦痛を生み出すとの第2部の結果を受けてナルコレプシー治療において症状残存が心理社会的問題に及ぼす影響を明らかにすることとした。6章ではナルコレプシー患者324名の質問紙データの分析から、残存する眠気で注意集中困難が生じ、それが大雑把との自己評価に、また対人関係の疎遠が生じ、それが非積極的との自己評価につながることを示した。7章ではナルコレプシー患者10名への面接データの質的分析によって、居眠りへの周囲の反応に対する否定的認知が対人回避につながるとの仮説を提出した。また8章では居眠りで失敗を繰り返すことで自責感や無力感をもつ場合と覚醒している時間を意識して積極的に活動する場合があることを見出し、認知や行動の変容、環境の調整によって心理的苦痛が改善する可能性があることを示した。

第4部では、得られた知見をまとめて睡眠障害では薬物治療開始後も症状が完全に消失するとは限らないことによって各症状に特異的な心理社会的体験プロセスが生じ、それが問題の維持・悪化につながることを示し、特にナルコレプシーでは睡眠衛生教育や曝露法等の心理社会的介入が重要となることを提案した。

本論文は、薬物治療後にも眠気が残存し失敗体験を繰り返しがちなナルコレプシー患者においては眠気の日常生活への悪影響を選択的に予測し、眠気が問題化しやすい場面を回避する悪化プロセスがあることを明らかにしたうえで、問題改善に向けて心理教育や曝露法といった具体的な心理社会的介入手続きを提案した点で特に意義が認められる。よって本論文は、博士（教育学）の学位を授与するに相応しいものと判断した。